

## 【曲目解説】

日本人に人気の高いクラシック音楽の作曲家の一人として、ドヴォルザーク(1841・9・8～1904・5・1)を上げてても間違いはないでしょう。彼のどの曲を取り上げてみても、全曲に溢れる瑞々しい旋律(ブラームスが、ドヴォルザークの旋律を生み出す才能に舌を巻いたというエピソードは有名です。)、温かみと優しさに満ちた曲調に魅了されます。本日演奏する「チェコ組曲」は、彼の作品としては、さほど有名な部類ではありませんでしたが、一世を風靡した「のだめカンタービレ」中で取り上げられましたので、御存知の方も増えたのではないのでしょうか。1879年3月4日から書き始められたこの曲の鉛筆書きでは、当初曲名は「セレナード」と書かれていたようです。彼のセレナードとしては、弦楽のための作品22、管楽器のための作品44がありますが、それに続くオーケストラのセレナードとして考えていたのかも知れません。完成されたものは、チェコの民族舞曲、ポルカ、ソーセドスカ、フリアントを配し、チェコの風土や人々の様子を描き出した佳品となっています。

オネゲル(1892・3・10～1955・11・27)は、ドビュッシー、ラヴェルに続くフランス近代の作曲家ですが、両親はスイス人です。オネゲルについては、「(フランス)6人組」の一人であること(他の作曲家は、オーリック、デュレー、タイユフェール、ミヨー、プーランク。オネゲルとミヨー、プーランク以外あまり知られていないのでは…。)、作品としては「(機関車)パシフィック231」「火刑台上のジャンヌ・ダルク」などがよく知られていると思います。第2次世界大戦中、オネゲルは人類と芸術の前途への暗い思いに捕われ、人間の心の苦悩、葛藤、そしてその克服が作品の表に出てくるようになります。終生変わらなかったバッハへの尊敬、キリスト教への信仰に加え、晩年は人間の文明への不信が彼の作品の中心になりますが、本日演奏する「交響詩、夏の牧歌」は初期1920年、ランボーの詩集「イリュミナシオン」中の傑作「黎明」に触発されて書かれたものです。楽譜には詩の冒頭「僕は夏の黎明を抱きしめた」が書き込まれています。両親の故郷、スイスの田園風景も描き出されているようです。

シューマン(1810・6・8～1856・7・29)は、1843年にライプツィヒの音楽院(メンデルスゾーンが設立)で教鞭を取り始めましたが、性格的に向かない仕事がかねてから衰弱気味の神経を刺激し、次第に体調を崩していきます。翌年、クララとの結婚前からの約束を果たすのと、収入を得ること、気分転換をはかるためにロシアへ5ヶ月の演奏旅行に出かけます。これで幾分元気になり、創作力も回復するかにみえましたが、メンデルスゾーンが辞任したゲヴァントハウス管弦楽団の後任指揮者になれると期待していたところ、選出されず、ゲーゼがその地位につくという事件で、シューマンはさらに神経を刺激されます。死への極度な怖れ、高い丘や高い建物への異常な恐怖心にとりつかれます。そこで、1844年12月、以前から気に入っていた都市、ドレスデンへ転居します。落ち着いた街の雰囲気、温かく迎え入れてくれる人々、そして何より以前から親交の厚かったメンデルスゾーンとの密接な文通で、シューマンは次第に健康を取り戻して行きます。1845年9月、メンデルスゾーン宛ての手紙に「少し前から、私の中でハ調のトランペットが響いています」と書いていますが、これが第2交響曲の楽想に発展したのです。彼は完成後に「これは私がまだ半分病気の時にスケッチした。いわば、そういう病気に反抗した作品である」と語っています。初演は、1846年11月5日、メンデルスゾーンの指揮でなされています。